

## 第1章 第2節 申采浩と朝鮮革命宣言

### 1. その生涯

丹齋 申采浩(1880~1936)は負い、忠清道の名もない学者。申光植の二男として生まれ、日帝統治下の独立運動にその一生を捧げた。

幼くして漢学を学び、19才で成均館に入り、1905年には成均館博士となった。同年皇城新聞論説委員、翌年には、大韓毎日申報主筆として救国運動の先頭に立った。

庚戌国恥(1910)を契機として祖国を離れ、独立運動を論議するための青島会議を開いて、その後、ウラジオストックに行き、「海潮新聞」「青丘新聞」「勸業新聞」等に関与して露領韓人産の独立運動を指導した。

1915年北京で申奎植と「新韓青年会」を組織し、朴殷植、文一平らと「博達学院」を設立した。1919年上海に臨時政府が出来、全院委員会委員長に選ばれたが、辞任して教化主義的準備論に反対し、臨時政府を積極的な闘争機関とすることを主張する創造派に加わった。

このころは1917年にロシア革命が進行中であり、1918年に一次大戦が終結したし、1919年には我が国の3・1運動と、中国の5・4運動が起った全世界的な変革の時期であった。

そうした1918年申采浩は北京大学教授 李石曾の紹介で普陀庵において朝鮮史を執筆していたが、同大学所蔵の「四庫全書」閲覧の便宜も提供された。北京大学は当時中国の知的中心地であった。李石曾と彼を招聘した同大学総長蔡元培はパリグループメンバーとして中国アキズムの草創者であり、5・4運動の精神的支柱であった。北京に於て申采浩は、これらと深い友誼を結んでいたのである。

一方申采浩は広東と上海でアキズム運動を広めていた劉思復の論説などを取読したし、日本アキズムの元祖 幸徳秋水の「基督抹殺論」に深く共鳴したのだった。

1932年義烈団の要請で丹齋は「朝鮮革命宣言」を起草した。過去の時代的背景と精神的状況でこの宣言は作成されたのである。これは民族独立運動をアキズムの原理で貫徹することを宣言した記念碑的文書である。

その後、1924年4月に組織された在中國朝鮮無政府主義者連盟に協賛して、その機関紙「正義公報」に執筆し、1928年に組織された東方無政府主義連盟に加盟して、「東方」誌に雄渾な論説を寄稿した。東方連盟傘下秘密結社の国際為替事件に参画して台湾基隆港に上陸時、日警に逮捕され、大連で10年の刑を受け、旅順刑務所に服役中、1936年2月21日獄死した。享年57才。

## 2. 朝鮮革命宣言に盛り込んだアナキズム

宣言は「強盗日本が我々の国号をなくし、我々の政權を奪い、我々の生存的必要条件の全てを剝奪した」という言葉で始まった。そして、日帝の吸血鬼的収奪行為を一つ一つ指摘して、野蠻的迫害を一つ一つ糾弾しながら「以上の事実を根拠に我々は日本強盗政治即ち異族統治が我が朝鮮民族生存の敵であることを宣言すると同時に、我々は革命手段として我が生存の敵である強盗日本を殺伐することが即ち我々の正当な手段」と宣布している。

この条項を3・1運動の「独立宣言文のなかの行動綱領「約法三章と比較すれば、その革命的な性格が明白である。「約法三法」は次の通りである。

- 一、自主するとは、精神を發揮すること、排日感情に流れるな。
- 二、最後まで民族の念願が何であるかを表示し、局限はう。
- 三、日常の現在秩序を乱すことなく、謀略と密行を禁じる。

3・1運動は参加人員200万以上、集会回数1500以上、被殺者7500、被傷者16000、破壊した民家700余戸、教会堂47、学校2ヶ所という莫大な被害を出した。それは本当に鮮血を山野に振りまく凄惨な抗争であった。反面、日本人の人命財産には全く損失もなかった。これが「約法三章」の結末であった。全国的規模の民族的抗争であり、全世界被圧迫民族闘争史に輝く一ページを飾ったが強盗日本の銃剣と軍靴に踏みこぼされて、この運動は短期間で水泡と帰してしました。

これは対照的に朝鮮革命宣言は我が民族に対する政治的圧迫者、経済的搾取者、日本強權を明白に敵と規定して断乎たる決戦を宣布している。それは敵に対する協商や請願のたぐいではなく、妥協の余地のない断乎たる戦闘の宣布である。ここにアナキズムの反強權主義的面貌が如実に現れている。

二番目にこの宣言は民族独立運動を民衆解放運動と同一視している。「今日革命と言ふは、民衆が即ち民衆自己の為にする革命であるから民衆革命とか、直接革命と呼び、民衆直接の革命であるからその比重膨張の熱度が明らかな強弱比較の觀念を打破するし、その結果の成敗が常に戦争学上の定軌をはずし、無銭無兵の民衆で、百万大軍と億万富力を持った帝王も打倒するし、外寇も追いつからず、それで我々の革命の第一歩は民衆覺悟の要求」と言っている。

解放の問題に、「民衆自身による民衆自身の課業」ということはアナキズムの基本原則である。「労働者農民の解放は労働者農民の力で」ということがアナキストの原則である。いわゆる直接革命であり、民衆革命である。民衆の外に上で民衆を指導するエリートの集団をアナキストは拒否する。このことが共産主義者達と根本的に異なる点である。アナキストはいつでも民衆の中で、民衆と共にすることで民衆自身が直接自己を解放すべきことを要求する。そうでなければ「革命はただ行つた支配者の代りに他の支配者を行つた支配階級

の代りに他の支配階級を上げ上げて坐らせる結果にしがならないのである。

この立場からの宣言は当時の知識人達によって論じられた自治運動、文化運動、外交論準備論等の一切を拒否している。

三番目に、革命方法で民衆蜂起に訴えたことがこの宣言のアナキズム的特色である。「一般民衆が飢寒困苦、妻呼見啼、納税督棒、私債催促、行動不自由等あらゆる圧迫の……主因となる強権政治の施設者である強盗達を激懲し……勇者はその義憤に勝てず、弱者はその苦痛に耐えられず、全この道に集まって、継続的に進行し、普遍的に伝わりて挙国一致の大革命が出来れば、猾狹残暴な強盗日本の駆逐される時だ」と言った。全ての国民が各自の立場と各自の力量に従って総決起する民衆運動を言っている。労働者の罷業、農民の小作料拒否、納税拒否等あらゆる分野での消極的又は積極的非協調、不服従に始まり、闘士達の暴力による抗争に至るまであらゆる手段が動員されることを要求している。

四番目に破壊の強調である。「革命の道は破壊から開拓すべきである。しかし破壊のみはよく破壊するのではなく、建設のために破壊するのであるから、もし建設することが判らなければ、破壊することも判らないうし、破壊することが判らなければ建設することも判らないうし」と言った。以前プルードンは「私は破壊して建設する」と言っている。バクニンも「破壊への情熱は同時に創造への情熱である」と言った。アナキスト達がこのように破壊を主張するが、それは死があって生まれれば新しい生命が誕生する自然の世界の如く、永遠の創造過程の一部としてそれを認めることであり、また自由な人間は破壊された廃墟から再び建設し、更によりよく建設することが出来る能力を持っていると信じるためである。アナキストの中でも最も破壊主義者と認められるバクニンは「流血の革命は、人類が愚かなためにしばしば必要となる。しかしそれはそれが招く犠牲に関してだけでなく、その名の下に敢行される目的の純粹と完全とによっても、またいつでも悪い、非常に悪い、大惨事である。」ということをおぼろげに忘れた。喜んで破壊ではなく、やむを得ずして行う破壊ということである。「宣言」は破壊の目標を次のように設定した。

第1は、異民族統治を破壊しようということである。何故か。朝鮮というその上に日本という異族が専制しているから、固有の朝鮮を取り戻すためだ。

第2は、特権階級を破壊しようということである。何故か。朝鮮民衆というその上に総督とか何とか言う強盗団の特権階級が圧迫しているから……自由な朝鮮を取り戻すためだ。……

第3は、経済掠奪制度を破壊しようということである。何故か。掠奪制度下にある経済は、民衆自身が生活する為に組織した経済ではなく、民衆を苦しめて強盗を肥やすために組織された経済だから、民衆経済を取り戻す為に、経済掠奪制

度を破壊するのだ。

第4は、社会の不均衡を破壊しようということである。何故か。弱者の上に強者がおり、賤者の上に貴者がおり、全体的不均衡を持った社会は、初めは少数の幸福のために多数の民衆を犠牲にして、終りにはまた少数同志お互いに犠牲して民衆全体の幸福がつかまるころ数字上0となってしまうだけだから、民衆全体の幸福を増進するために、社会的な不均衡を破壊するのだ。

第5は、奴隷的文化思想を破壊しようということである。何故か。遺棄した文化思想の宗教、倫理、文学、美術、風俗、習慣、その他一つをとっても強者が作り、強者を擁護したものではないか、一般民衆を奴隷化した麻酔剤ではないか、… しまったから、民衆文化を提唱するために、奴隷的文化思想を破壊するのだ。

もう一度言えば、固有な朝鮮の、自由な朝鮮民衆の、民衆的経済の、民衆的社会的、民衆的文化的朝鮮を建設するために、異族統治の、掠奪制度の、社会的な不均衡の、奴隷的文化思想の現状を打破することである。それは即ち、破壊的精神での建設的主張である。… 今、破壊と建設が第一であり、第二ではないということに認識し、**■**民衆的破壊の前に必ず民衆的建設があることを認識し、現在朝鮮民衆は、ただ民衆的暴力で新朝鮮建設の障害である強盗日本勢力を破壊することだけであることを認識し、朝鮮民衆が日本強盗に丸木橋に立たされたことを認識し、我が2000万民衆は一致して暴力破壊の道を進むのである。

民衆は革命の大本營である。 暴力は我が革命の唯一の武器である。

我々は民衆の中に入り、民衆と手を握り、限りなく暴力で強盗日本を打倒し、我々の生活に不合理な一切の制度を改造し、人類で人類を圧迫できず、社会で社会を剝削できない理想的な朝鮮を建設するのである。

1923年 1月

義烈団

丹齋がこの宣言で無階級の自由平等な新朝鮮のための独立、即ち民衆解放を主張している以上、その思想は本質的にアナキズムであり、その活動はアナキストとしての活動と言わざるを得ない。アナキストとして運動を行って、殉国者を指してアナキストでなかつたとか、またアナキズムは一つの方に過ぎないのでと評することは冒瀆であると解する。

丹齋の死後1945年に「世界社」代表李石曾は鄭華若と協力して「甲采浩学社」を設立した。二人の有誼がよくわかる。鄭華若と李何有は戦後李石曾、吳稚暉、楊家路、朱洗らの協力を得て「朝鮮学典館」を上海に設立した。